

紫陽花

泉鏡花

青空文庫

一

色青く光ある蛇、おびたゞしく棲めればとて、里人は近よらず。其野そののやしろ社は、片眼の盲
 ひたる翁ありて、昔より齊眉かしずけり。

其片眼そのを失ひし時一たび見たりと言ふ、几帳の蔭に黒髪のたけなりし、それぞ神なるべ
 き。

ちかきころ水無月中旬、二十日余り照り続きたる、けふ日ざかりの、鼓子花ひるがおさへ草いき
 れに色褪せて、砂も、石も、きら／＼と光を帯びて、松の老木おいきの梢より、糸を乱せる如き
 薄き煙の立ちのぼるは、木精こだまとか言ふものならむ。おぼろ／＼と霞むまで、暑き日の静さ
 は夜半にも増して、眼もあてられざる野の細道を、十歳とおばかりの美少年の、尻はしよを端折り、
 竹の子笠被りたるが、跣足はだしにて、

「氷や、氷や。」

と呼びもて来つ。其より市に行かんとするなり。氷は筵むしろづつみ包にして天秤に釣したる、
 其片端には、手ごろの石を藁繩わらなわもて結びかけしが、重きもの荷ひたる、力なき身体によ

ろめく毎に、石は、ふらゝこの如くはずみて揺れつ。

とかうして、此の社の前に来りし時、太き息つきて立停りぬ。

笠は目深まぶかに被りたれど、日の光は遮らで、白き頸うなじも赤らみたる、渠かれはいかに暑かりけむ。

蚯蚓みみずむくろの骸の干乾びて、色黒く成りたるが、なかばなまゝしく、心ばかり蠢うごめくに、赤き

蟻の群りて湧くが如く働くのみ、葉末の揺るゝ風もあらで、平たき焼石の上に何とか言ふ、尾さきの尖の少し黒き蜻蛉とんぼの、ひたと居て動きもせざりき。

かゝる時、社の裏の木蔭より婦人おんな二人出で来れり。一人は涼傘ひがさ畳み持ちて、細き手に杖としたる、いま一人は、それよりも年少わかきが、伸上るやうにして、背後より傘さしかけつ。

腰元なるべし。

丈高き貴女をつむりは、傘のうらに支ふるばかり、青き絹の裏、眉のあたりに影をこめて、くらく光るものあり、黒髪にきらめきぬ。

怪しと美少年の見返る時、彼かの貴女、腰元を顧みしが、やがて此方こなたに向ひて、

「あの、少しばかり。」

暑さと疲労つかれとに、少年はものも言ひあへず、纔わずかに領うりきて、筵を解きて、笹の葉の濡れたるをざわゝと搔分けつ。

雫落ちて、雪の塊は氷室より切出したるまゝ、未だ角も失せざりき。其一角をば、鋸もて切り取りて、いぎとて振向く。睫まつげに額の汗つたひたるに、手の塞ふさがりたれば、拭ひもあへで眼を塞ぎつ。貴女の手どに捧げたる雪の色は真黒なりき。

「この雪は、何うしたの。」

美少年はものをも言はで、直ちに鋸の刃を返して、さら／＼と削り落すに、粉はばら／＼とあたりに散り、ぢ、ぢ、と蟬の鳴きやむ音して、焼砂に煮え込みたり。

二

あきなひに出づる時、継母の心なく嘗かつて炭を挽きしまゝなる鋸を持たせしなれば、さは雪の色づくを、少年は然りとも知らで、削り落し払ふまゝに、雪の量たなそこは掌たなに小さくなりぬ。別に新しきを進めたる、其もまた黒かりき。貴女は手をだに触れむとせで、

「きれいなのでなくつては。」

と静にかぶりをふりつゝいふ。

「えゝ。」と少年は力を籠めて、ざら／＼とぞ搔いたりける。雪は崩れ落ちて砂にまぶれ

つ。

澁々捨てて、新しきを、また別なるを、更に幾度か挽いたれど、鋸につきたる炭の粉の、其都度雪を汚しつつ、はや残り少なに成りて、笹の葉に蔽はれぬ。

貴女は身動きもせず、瞳をすゑて、冷かに瞻りたり。少年は便なげに、

「お母様に叱られら。お母様に叱られら。」

と訴ふるが如く呟きたれど、耳にもかけざる状したりき。附添ひたる腰元は、笑止と思ひ、

「まあ、何うしたと言ふのだね、お前、変ぢやないか。いけないね。」

とたしなめながら、

「可哀さうでございますから、あの……」と取做すが如くにいふ。

「いゝえ。」

と、にべもなく言ひすてて、袖も動かさで立ちたりき。少年は上目づかひに、腰元の顔を見しが、涙ぐみて俯きぬ。

雪の碎けて落散りたるが、見るく水になりて流れて、けぶり立ちて、地の濡色も乾き

ゆくを、怨めしげに瞻りぬ。

「さ、おくれよ。いゝのを、いゝのを。」

と貴女は急せきこ込みてうながしたり。

こたびは鋸を下に置いて、筵むしろの中に残りたる雪の塊を、其まゝ引出して、両手に載せつ。

「み、みんなあげよう。」

細りたる声に力を籠めて突出すに、一掴みの風冷たく、水気むらくと立ちのぼる。

流るゝ如き瞳動きて、雪と少年の面を、貴女は吃きつとみつめしが、

「あら、こんなぢや、いけないツていふのに。」

といまは苛いらてる状さまにて、はたとばかり搔退かひのけたる、雪は迂すべり落ちて、三ツ四ツに碎けた

るを、少年のあなやと拾ひろひて、拳を固めて掴むと見えし、血の色颯と頬を染めて、右めで手に

貴女の手を扼とりしぼり、ものをも言はで引立てつ。

「あれ、あれ、あれえ！」

と貴女は引かれて倒れかゝりぬ。

風一陣、さら〜と木の葉を渡れり。

腰元のあれよと見るに、貴女の裾、袂、はらくくと、柳の糸を絞るかのやう、細腰を振
りてよろめきつゝ、ふたゝび悲しき声たてられしに、つと駈寄りて押隔て、

「えゝ！ 失礼な、これ、これ、御身分を知らないか。」

貴女はいき苦しき声の下に、

「いゝから、いゝから。」

「御前——」

「いゝから好きにさせておやり。さ、行かう。」

と胸を圧して、馴れぬ足に、煩はしかりけむ、穿物を脱ぎ棄てつ。

引かれて、やがて蔭ある処、小川流れて一本の桐の青葉茂り、紫陽花の花、流にのぞみ
て、破垣やれがきの内外に今を盛りなる空地の此方に来りし時、少年は立停りぬ。貴女はほと息
つきたり。

少年はためらふ色なく、流に俯して、掴み来れる件の雪の、炭の粉に黒くなれるを、そ
の流れに浸して洗ひつ。

掌にのせてぞ透し見たる。雫ひたくと滴りて、時の間に消え失する雪は、はや豆粒の

やゝ大なるばかりとなりしが、水晶の如く透きとほりて、一点の汚もあらずなれり。
きつと見て、

「これでいゝかえ。」といふ声ふるへぬ。

貴女は蒼く成りたり。

後馳せに追続ける腰元の、一目見るより色を変えて、横様にしつかと抱く。其の膝に倒れかゝりつ、片手をひしと胸にあてて。

「あ。」とくひしばりて、苦しげに空をあふげる、唇の色青く、鉄漿つけたる前歯動き、地に手をつきて、草に縫れる真白き指のさきわな々きぬ。

はツとばかり胸をうちて瞻るひまに衰へゆく。

「御前様——御前様。」

腰元は泣声たてぬ。

「しづかに。」

幽なる声をかけて、

「堪忍おし、坊や、坊や。」とのみ、言ふ声も絶え入りぬ。

呆れし少年の縫り着きて、いまは雫ばかりなる氷を其口に齎しつ。腰元腕をゆるめたれ

ば、貴女の顔のけざまに、うつとりと目を睜みひらき、胸をおしたる手を放ちて、少年の肩を抱きつゝ、ぢつと見てうなづくはしに、がつくりと咽喉に通りて、桐の葉越の日影薄く、紫陽花の色、淋しき其笑顔にうつりぬ。

青空文庫情報

底本：「花の名随筆の 六月の花」作品社

1999（平成11）年5月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二巻」岩波書店

1942（昭和17）年9月

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2002年4月24日作成

2014年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紫陽花

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>